

「明日の美術館をつくろう。県民トーク」での主な意見

H24.9.1 現在

開催日:平成24年6月22日(金) 15:30~16:00 会場:滋賀県厚生会館(大津市)
参加者:ぴかつtoアート展実行委員会委員(福祉団体、福祉施設関係者等)(約15人)
近代美術館だけでなく、文化ゾーン全体が不便で、今のままではあまり行きたくない。駐車場から各施設への距離が遠い。バリアフリー化を進めてほしいし、バス路線も改善してほしい。
この計画とおりのことをするには、人員がかなり必要。優先度の高いものから進める年次計画が必要ではないか。
文化財やアール・ブリュットが一か所で見られるようになるのは嬉しい。
常設展観覧料の無料扱いの対象を、精神障害者福祉手帳2級の方などにも拡大してほしい。
学校からバスに乗って見学に来られるようにすることが必要。
知的障害のある子は、近代美術館に行ったとき、「怖い」という感想だった。静かに見なければならぬという雰囲気があるからでは。もう少し楽しみながら見られる雰囲気になればいい。
近代美術館は静かに見てすぐ帰る感じ。子どもたちが長居できない。子どもの描いた絵のコンクールをすれば人が集まるのではないか。

開催日:平成24年6月29日(金) 15:30~16:00 会場:旧滋賀会館(大津市)
参加者:県芸術文化祭実行委員会美術部門委員会委員(美術団体関係者)(約35人)
計画に書かれていることは、素晴らしい内容。しかし、かなり施設の増設が必要に思える。この計画は予算が認められているという前提か。
少なくとも常設展示スペースは確実に増えると思われるので、その分、企画展示スペースが圧迫されるような、最悪のパターンにならないか心配。予算をしっかりと確保してほしい。
現在分野を分けて2期で開催している県美術展覧会の1期開催をしっかりと位置づけてほしい。
滋賀県の障害者アートは、本来のアール・ブリュットではないのでは。美術館に収蔵することで、県民の目から乖離しないか。
滋賀県の美術は今、美術館も含めて停滞している。そこを突破するには、若い人たちをいかに育てていくかということが大切である。
本来学芸員は、研究の時間や少し先を見据えて余裕を持って仕事をできる環境を用意しないとイケないが、現在はそうなっていない。
どんな指導者を育てるかが大切。だからこそ、今回の計画も、30年後を見据えて今からスタートする、そんな認識が必要では。
この計画がいい方向になるようにみんなで議論して、協力して前進するようにしていきたい。

<p>開催日:平成24年7月9日(月) 16:30~18:00 (終了後交流会~20:00) 会場:ファブリカ村(東近江市)</p> <p>参加者:ファブリカ村と公益財団法人滋賀県産業支援プラザの共催によるプレゼン大会参加者(起業家、NPO関係者等)(約40人)</p>
<p>利用者の目線で見ると、現在の近代美術館と比較して何を換えようとしているのか、明確に表現した方がいい。</p>
<p>何のジャンルを扱うかという「物」の話よりも、美術館のコンセプトや姿勢がどう変わるのかが大事では。</p>
<p>アール・ブリュットに素晴らしい作品があるのは確かにそう思うが、積極的にコレクションされると言われると違和感を感じる。美術館であれば、いいものはいいという、普遍的な価値観の中で考えるべき。</p>
<p>利用者の目線で見るとときにショップやレストランは美術館の重要な機能。おまけではなく、しっかり計画にどのようなものを目指すのか位置付けてほしい。</p>
<p>ショップの販売物やレストランの食材は滋賀県産のものにこだわってほしい。</p>
<p>滋賀には、手仕事にこだわって商品や作品を作る作家や職人がたくさんいる。美術館が彼らの作品の展示・販売の機会や場所を提供すれば、大きな支援にもなるし、集客にもつながる。</p>
<p>公園内に子どもが遊べるアート作品(遊具)やオブジェを配置すれば、名所として遠方からでも家族連れがやってくる。公園内に美術館があるという特性を考えると、他の美術館には無い、大きなアピールポイントになる。</p>
<p>美術館がこれまでと変わろうとしている姿勢を感じた。</p>
<p>美術館が今の滋賀の人や地域としっかり繋がろうという考え方は嬉しい。活動する人たちの支えや憧れの存在になってほしい。</p>

<p>開催日:平成24年7月26日(木) 15:00~16:00 会場:コラボしが21(大津市)</p> <p>参加者:琵琶湖文化館と文化財保護課による滋賀の文化財講座「打出のコヅチ」の参加者(県民)(約20人)</p>
<p>本来、琵琶湖文化館と近代美術館は支持母体が違う。全国でも4位という数の文化財の重みを考えると、あいまいな形で統合ということには抵抗感がある。</p>
<p>琵琶湖文化館から琵琶湖博物館や近代美術館へ、機能を分化させながらこれまで充実させてきた経緯がある。今回の話はその逆行になるのではないか。</p>
<p>子どものための教育機能もいいが、大人の生涯学習機能も大切にしてほしい。</p>
<p>財政状況が厳しくて琵琶湖文化館は休館したと思っているが、この計画には財政上の担保があるのか。</p>
<p>常設展示は博物館の命である。しっかりと展示して、滋賀の仏教美術の魅力を伝えてほしい。</p>
<p>神と仏の美の作品だけに留まらず、仏教文化という、文化そのものを表現できるようにしてほしい。</p>
<p>博物館的要素も強くなってくだろう。美術館という名称は無理があるのではないか。美術館と博物館が併設されているという形も考えてはどうか。</p>
<p>現在の近代美術館の場所は不便すぎる。特に足の弱い高齢者等にとっては、足下も悪く行きにくい場所。交通の改善は不可欠ではないか。</p>
<p>滋賀の美の宝物を美術館に仕舞い込んでしまうと、なかなか見られなくなってしまうのではないか。</p>
<p>アール・ブリュットについて、福祉の立場から見ると芸術の立場から見るとでは全然違う。そのあたりをしっかりと踏まえてほしい。</p>
<p>多くの集客を求めていくことを第一に考えて、アプローチの改善や、アピールのやり方を考えてほしい。</p>
<p>今年、東京(三井記念美術館)で開催するような、収蔵品を県外で展示する機会を持つことは大切ではないか。</p>

開催日:平成24年8月1日(火) 19:00~20:15 会場:山里暮らし交房「風結い」(高島市)
参加者:風と土の交藝2012プロジェクトチームメンバー(作家、団体、学生等)(約25人)
近代美術館は交通が不便というイメージが強くて、足が遠のいてしまう。
アール・ブリュットは、世界からも人を呼べる、美術館としての重要なコンテンツになるのではないか。
アール・ブリュットを扱うならば、徹底的に前面に押し出していくべき。
アーティスト・イン・レジデンスを実現するべき。滞在したアーティストの作品は、そのまま県に残してもらおうようなやり方にしてはどうか。
展示を見て、レストランで食事をして、ワークショップに参加してといった形で、美術館で一日を楽しむ時間の使い方ができるかどうか、足を運んでもらう上では重要ではないか。
近代美術館は展示解説が固くてとつきにくい。専門家である学芸員は、自分が勉強すればするほど、それを表現したくなる。一般の人に考えてもらうなど、視点を変えてみる必要がある。
本当に人がたくさん来ることが大切なのか。多くの人を呼ぶことを前提に考えすぎると美術館としての使命が見えなくなり、特徴のない美術館になってしまうのではないか。
滋賀には展示できるスペースを備えた施設が各地にたくさんある。そういったところに美術館の作品を巡回したり、一斉に展示したりすればいいのではないか。

開催日:平成24年8月28日(火) 10:00~12:00 会場:近代美術館ワークショップ室(大津市)
参加者:近代美術館サポーター会(約30人)
なぜ新生美術館の整備が必要なのか、時代背景や社会背景を明確にした方がいいのではないか。
基本方針は、どこの施設でも当たり前求められる項目に見える。新生美術館らしさがもっと表現された方がいい。
来館者数が減少しているのは、時代の変化で美術館が見せたいものと、多くの人が見たいものが一致なくなってきたのではないか。運営にあたっては、どういうものが求められているのかりサーチし、見せたいものととのバランスをとる必要がある。
現在の美術館の現状と計画との落差は大きい。新生美術館のスタートを待たずとも、今からこのギャップを埋める取組をしていく必要があるのでは。
これからの時代は、インターネットで有効に情報を出していくことが重要なポイントになる。組織の中に、そのための専門家が必須ではないか。
展覧会を見て、自然の中でのんびりしながら一日時間を過ごすことができるようになることが重要。そのためにも、レストランやカフェが充実していることが前提になる。
アール・ブリュットの作品は本当に集められるのか。現在は評価する基準やシステムもないし、専門家もいない。
どれだけいい作品がたくさんあっても、まずは美術館に足を運び、見てもらうきっかけが無ければ話は始まらない。来館者層の拡大は大切。
ただ美術館をつくるだけでなく、それが持続可能かどうか、支持され続けるかを考える必要がある。
美術館の地元である瀬田地域と連携し、地域ぐるみでお互いがにぎわう仕組みを考えていくべきでは。
これからの高齢化社会を考えても、アクセスの問題は切実。バスの乗り入れを真剣に検討すべき。
駅やバス停、公園内に、美術館へ来たという気持ちが盛り上がる仕掛けが必要では。
現在のレファレンスルームの機能が生かされていないし、理解されていない。有効に情報を伝えたり、気軽に相談したりできるようにしていく必要がある。
湖北をはじめ遠隔地をどう捉えていくか。アウトリーチ活動にしても、現在のサポーターの活動では地理的な限界がある。例えば、地域にもサポーター組織を育成するといったことが必要になるのでは。
「美の滋賀」づくりの取り組みは、美術館だけでできるものではなく、県内各地でワイワイガヤガヤ言いながら考えて行動する場所を作っていく方がよい。
近代美術館のギャラリーは、展示会を開いても人が来ない。そうすると、評価もされないし作家も使いたがらない。市内のギャラリーで展示した方がよほど人に来てもらえる。もっとギャラリーの情報も伝えるようにできないか。
館として対話力を持つことが重要。来館者との話のキャッチボールや、利用者との意見のやりとり、メディアの対応を含め、双方向に対応する必要がある。

開催日:平成24年9月11日(火) 19:00~20:40 会場:ファブリカ村(東近江市)
参加者:「湖の国のかたち(メイド・イン・滋賀・プロジェクト)」運営委員会(約10人)
滋賀は多様性が特色であり魅力でもある。人もいろいろな人がいる。新しい美術館も、そういった滋賀らしさを表した、多様性のあるどこにもないものを目指してほしい。
文化財をしっかり守り、生かすことのできる施設ができることはとても重要。地域の文化財を守る活動の底上げにもなればよい。
子どもたちがアート作品に触れられる場所を設けてもらいたい。衝動に突き動かされるままに、触って感じることは大切。
滋賀県には、他府県から親子連れでの流入も多い。異年齢の子どもたちが集えるような機会や場所を設けてほしい。
アートで遊び、五感で感じることができる機会を提供してほしい。そうすれば、視覚障害や聴覚障害、ダウン症の人も、誰でも楽しめる。場合によってはレプリカでもいい。
「にぎやかな美術館」という考え方はいい。静かになりすぎず、ざわざわしていて、自由にアートで遊ぶ中から、次の一步を踏み出すきっかけになれば素晴らしい。
美術館と博物館の違いを取っ払った、新しい形を目指してほしい。
ミュージアムショップの展開は美術館の重要な柱になる。滋賀の作家、アールブリュットも含めて、適正な価格で買ってもらえる販売場所があるということは、作者への支援にもなるし、意義が大きい。
福祉作業所で作られた織をはじめとした製品が、美術館で販売されて、その価値が認知されれば嬉しい。
滋賀県産の食に関する販売場所は最近増えてきていて、賑わっているが、アートや美に関する作品や商品がそろっている場所は無い。美術館のショップがそこを目指しても良いのでは。
週末だけや、月に一度でもいいので、市(マルシェ)のような形で、アートに関するものや、それ以外も、売るようにすれば、出店のハードルも低く、多くの作り手が参加できるし、集客も期待できる。
幼児のころからアートの体験を通じて表現力やコミュニケーション能力、創造力を身につける教育プログラムを提供してほしい。
美術館という場所で、美術に限らずパフォーマンス、先進的なものをはじめ、色々なものに出会えることは、美術館の幅を広げることにつながる。
美術に関心がなく、特に遠方であれば美術館へ行かない人が多い。たまにでもいいので、出張美術館のような形で、身近な場所で作品を見る機会があれば、そこから美術館へ行こうという人も出てくるのでは。
人によって興味はいろいろで、元から美術が好きな人は限られる。県内にも近代美術館へ行ったことが無い人は多い。そういった人たちを呼び込む、きっかけとなる幅広い取り組みが大事。
美術は自分には関係ないと思っている人たちに、生活すべてに「美」はかかわっているということに気づいてもらえるよう、身近なところからつなげていくようにしてほしい。
小学校へ美術館から出かけて行って、子どもたちに美術館があるということを知ってもらうことが必要。
館内に公衆無線LANが無料で利用できるエリア(フリースポット)があれば、来館者が自由に情報収集できるし、逆に美術館の情報を自ら発信してくれることにもなる。
活動の間口を広げて、できるだけ多くの人にかかわってもらえることを念頭に置いてほしい。いろいろな人の思いが集まる場になれば、施設が生きてくる。